

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

人生の先輩を大切に

秦野市立南中学校

三年 青山夏凜

私は部活動の練習の後、帰宅しようとのんびり歩いているところである1人のおばあちゃんに出会いました。そのおばあちゃんにかけてもらった言葉は今でも私の心に刻まれています。

蒸し暑い炎天下の中、おばあちゃんは横断歩道をゆっくり渡ろうとしていました。腰を曲げながら重そうな袋を持ってよたよたと進みます。するとおばあちゃんが横断歩道の間にある時に信号が赤になってしまったのです。手前の車からクラクションの音が響き、「助けなくちゃ。」

気付いた時には既に走り出していました。

「荷物、持ちますね。」

手を貸しておばあちゃんと一緒に歩き、渡り切ることができました。

「大丈夫でしたか。」

と声をかけると

「ありがとうね、助かったわ。」

とおばあちゃん。とても優しく温かい口調でした。おばあちゃんは申し訳なさそうに、

「急がないと迷惑なのはわかっではいるけれど、この速さがやつと。腰が痛くて痛くて。」

家までお送りしましょうかと尋ねると

「あなたはいくつなの。若いのにこんな年寄りに気を配れるなんて良い子ね。近頃の若い子の印象が変わったわ。」

と嬉しそうな顔をして言いました。

おばあちゃんは帰り道、次のことを話してくれました。歩道で真横をすれすれで自転車が通った、お店のレジでお会計をする時に店員の方に遅いと舌打ちをされた、バスで席を譲って欲しいと頼んだら無視をされたなど今まで経験したことを悲しげな顔で。どれも若い人だったそうです。そんなことをするなんて。私は衝撃を受けました。おばあちゃんの気持ちを考えた時の、胸がきゅっと締め付けられるようなあの感覚は今でも忘れられません。何と声をかけて良いか、わからなくなってしまうました。

おばあちゃんの家に着くと

「本当にありがとう。あなたのような子が増えてくれれば良いのにね。私のようにあなたの優しさに救われる人はこれからもいるわ。」と笑顔で言ってくれました。

別れた後、話にあった体験談を自分なりに考え直しました。聞いた出来事は高齢社会へと進む今だからこそ絶対にあつてはならないことです。私たちにできることや何をすれば良いかを考え直すきっかけになりました。とても悲しいことだけれど起きているのが現実。嫌な気持ちになつている人が他にもいるはず。

「おじいちゃん、おばあちゃんをそんな気持ちにさせてはいけません。」
できることを手伝いたいと強く思いました。

まずは簡単なことからと、それから私は祖父母が普段1ヶ月に1回のペースで通っていたデイサービスについていくようになりました。今でもボランティアとして祖父母に混ざつておじいちゃん、おばあちゃんと一緒にお話しをしたり、折り紙を折つたりして楽しんでます。人生の先輩であるおじいちゃん、おばあちゃんのお話はどれもためになることばかりです。先輩から若い人たちが学ぶべきことはまだまだたくさんあるのではないのでしょうか。

私はおばあちゃんの

「あなたの優しさに救われる人がいる。」

という言葉に勇気をもらいました。自分ができることなんて、人にしてあげられることなんて、限られているだろうと決めつけていた今までの私にこの言葉は自分自身が持っている

可能性を大いに広げてくれたのです。おばあちゃんには感謝の気持ちでいっぱいです。今日も私はあの言葉を胸に学校生活を送っています。「福祉」という言葉が似合う素敵な世の中になりますように。そう願っています。

